

目的： 食事の根本的な機能は、生理的必要性をみたところにあるが、少なくとも日本文化においては、食事は対人的・社会的機能を果たす場としても考えられ重視されている。本研究では、共同体社会全体の常識的な理解と知識のフールを文化モデル、個人が日常の行動の中で認知し利用するその部分的な「オルターナティブ」を理論と呼び、食事文化モデルの形態と理論の発達過程を明らかにする。

方法： まず、食事文化モデルを浮き彫りにするために、成人80名（男子大学生20名・女子大学生20名・幼稚園生の子どもを持つ母親20名・高校生の子どもの持つ母親20名）に対して、食事らしい食事の情景・手順、その理由をインタビュー調査した。ついで理論の発達過程を明らかにするために、小学校2・4・6年生・中学2年生・大学生・小学生の子どもを持つ父親・母親（各年齢約200名：全合計1,258名）に質問紙調査を行った。

結果： インタビュー調査の結果、少なくとも成人には「夜・家で・家族と・手作りのもの、栄養のあるものを、話をしながら楽しく食べる」という典型的な食事像があり、それは「一緒に仲良く食べる」というイメージを、より可能に、より効果的にする要素によって構成されていることが示された。質問紙調査の結果、小学校2年生では食事の生理的機能が重視されるが、小学校6年生・中学2年生になると、家庭をベースとした対人的・社会的機能を重視する理論に移行する。大学生では、それに対する重視の度合はますます強まるが、しかしそのベースが家庭から離れること、そして親になると、再び家庭に戻るという変化が認められた。